令和５年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

(1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。

(2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

(3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1　調 査 日　令和５年４月１３日（木）

2　調査対象　品川区立学校　第２～９学年の全児童・生徒

3　調査内容

教科に関する調査

→　調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第２・３学年>　国語、算数
<第４～５学年>　国語、社会、算数、理科
<第　６　学年>　国語、社会、算数、理科、英語
<第７～９学年>　国語、社会、数学、理科、英語

品川区立第三日野小学校

国語科

【定着状況についての概要】

○本校の平均正答率の結果を見ると、すべての観点別及び基礎・活用において全国平均並みか全国平均を上回っている。

【具体的な課題とその原因】

◇領域別に見ると第２学年「書くこと」は全国の平均正答率及び区の平均正答率を下回っている。

校内平均正答率…66.7％
区平均正答率……68.9％
全国平均正答率…69.7％

・経験したことや創造したこと、自分の思いや考えが明確になるように、事柄の順序に沿って文章の簡単な構成を考えることができていない傾向にある。問題を解くことに時間がかかることで問題に取り組むことができていないことも原因の一つとして考えられる。

◇領域別に見ると第３学年「言葉の特徴や使い方に関する事項」は全国の平均正答率は上回っているものの、品川区の平均正答率と比べて若干低くなっている。

校内平均正答率…87.2％
区平均正答率……88.0％
全国平均正答率…85.7％

・日常的に漢字指導や反復練習の機会は設けているが、覚えなければいけない漢字の量に対して定着するための十分な時間となっていないことが原因の一つとして考えられる。

【解決のための方策】

① 「書くこと」の指導の充実

身近なことや経験したことや、思いや考えを順序立てて書く活動を増やす。自分の書いた文章を見返したり、友達に読んでもらったりしながら、文章を推敲し、より分かりやすい文章を書こうとする態度を育てていく。

② 漢字指導の充実

マイタイムを活用して、毎日短時間漢字学習を行う時間を保障する。ことのはノートや国語科の小単元を活用して、新出漢字の読み書きや活用の仕方が確実に習得できるようにする。ことのはノートの小テストで児童の理解度を確認し、定着していない児童については、再テストなどを行い、スモールステップでどの児童も理解できるようにしていく。

【次年度の数値目標】

●全学年の「書くこと」の領域の平均正答率が６０％になることを目指す。

算数科

【定着状況についての概要】

○正答率の結果を見ると、ほぼすべての観点別及び基礎・活用において品川区や全国の平均を上回っている。

【具体的な課題とその原因】

◇領域別では、ほぼすべての学年が全国平均正答率、品川区平均を上回っていた。ただ、唯一２年生の「データの活用」の領域のみ、全国の平均正答率と品川区の平均正答率を下回っていた。

校内平均正答率…76.4％
区平均正答率……78.4％
全国平均正答率…83.8％

・「データの活用」領域で学習したことを理解しているように見えるものの、作業的・体験的活動を通して実感をもって理解させる指導が不十分であると考えられる。作業的・体験的活動を通しての意味や性質について理解させ、基礎的・基本的な知識・技能の定着を図る必要があると考えられる。

【解決のための方策】

① データの活用領域の指導の充実

・T1 の指導者と指導助手が連携して、一人一人の力に合った作業や体験的活動ができる場面を増やしていく。
・ワークシートや e ライブラリや Qubena などを活用しながら反復練習を行い、
データ分類・整理の学習の定着を図る。

【次年度の数値目標】

●「データの活用」領域の平均正答率が８５％になることを目指す。

社会科

【定着状況についての概要】

○正答率の結果を見ると、５，６年生どちらもすべての観点別及び基礎・活用において品川区や全国の平均を上回っている。

【具体的な課題とその原因】

◇領域別では、５，６年生のどちらの学年も全ての領域で全国平均正答率、品川区平均を上回っていた。５年生の「伝統や文化、先人の働き」の領域のみ、唯一正答率が５０％を下回っていた。

校内平均正答率…49.0％
区平均正答率……42.5％
全国平均正答率…35.8％

・昨今の学校教育において、昔から地域に住まわれている方と児童との関わりが学年が上がるにつれて年々、希薄になってきているのではないだろうか。児童が「自分たちの暮らす地域」という帰属意識をよりもって日々の学習に取り組まなければならない。

【解決のための方策】

① 見学・調査したり、地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめる活動の充実

・当時の世の中の課題や人々の願いなどに注目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、年表などにまとめる。
・地域の発展に尽くした先人をゲストティーチャーに招いたり、地域の資料館に見学に行ったりし、生活の向上に向けて様々な苦心や努力をし、貢献された方がいることを理解させる。

② ICT を活用した調べ学習、表現活動の充実

・見学・調査したり、地域の方に話を聞くことが厳しい場合は、インターネットや文献などを活用し調べ学習を行い、ロイロノートなどを活用することで表現活動の充実を図る。

【次年度の数値目標】

●「伝統や文化、先人の働き」領域の平均正答率が６０％になることを目指す。

理科

【定着状況についての概要】

○正答率の結果を見ると、全学年とも目標値を上回っており、全国、区と比較しても高値を示した。

【具体的な課題とその原因】

◇第５学年のカテゴリー正答率をみると、「物質・エネルギー」の領域においては全国や区と比較して高かった。「生命・地球」の領域において全国や区の平均正答率と比較してほぼ横ばいであった。

〈物・エ〉　校内平均正答率…68.6％
区平均正答率……64.8％
全国平均正答率…61.7％

〈生・地〉　校内平均正答率…72.4％
区平均正答率……72.0％
全国平均正答率…71.9％

また、観点別では、「主体的に学習に取り組む態度」が品川区と全国の平均正答率を上回っていたものの、その差は他の観点に比べて小さかった。

〈主体的に学習に取り組む態度〉　校内平均正答率…53.6％
区平均正答率……52.4％
全国平均正答率…52.6％

・標準スコアによる分析結果より、第５・６学年は、ともに前年度の校内平均正答率を上回った。この要因として感染症がやや収束することにより実験等の実体験の機会が増え、そこで習得すべき知識や技能を確認したり、定着させたりする時間が得られるようになったことが考えられる。

【解決のための方策】

① 主体的な観察・実験活動
課題解決に向けて、教師が観察又は実験方法を児童に教えるのではなく、学び合いの機会を増やしながら既習事項を生かして児童が考えて活動できるようにしていく。グループごとに考えた観察や実験方法で活動することで、より主体的に活動できるようにしていく。

② 考察・まとめの活動の充実
各グループで行った観察や実験結果を基に、考察する時間を保障する。ノートやタブレットを活用し、自力で考察する力を付けることによって、理解力を上げていきたい。

【次年度の数値目標】

●区の平均正答率より５％パーセント上回ることを目指す。

英語科

【定着状況についての概要】

○本校の平均正答率の結果を見ると、12 カテゴリー中７項目は全国平均並みか、全国平均を上回っている。特に「読むこと」領域は全国平均より７％も高くなっている。一方で、全国平均を下回った項目のうち、３つは全国平均より５％程度低い。

【具体的な課題とその原因】

◆基礎・活用別では、「活用」問題に課題が見られ、全国平均を 4.2％下回っている。

◆観点別では、「主体的に取り組む態度」が全国平均を５％下回っている。

校内平均正答率…80.6％
区平均正答率…80.7％
全国平均正答率…85.6％

◆解答形式別では、「選択」問題は全国平均を 2.8％上回っているものの、「記述」問題では、5.5％下回っている。

校内平均正答率…77.4％
区平均正答率…77.3％
全国平均正答率…82.9％

今回課題となった「主体的に取り組む態度」「記述解答」は、品川区の平均正答率とほぼ同じであることから、品川区全体として上記の分野に力を入れる必要がある。

【解決のための方策】

○⑭の記述問題のように、たくさんの選択肢から選んで，紹介文を完成させる形式は、自分で考えて選択していることから、自分で文章を作成したことになり、自信と意欲につながる。授業でも、このような練習を取り入れていくとよい。

○日常の中で、生活に関わる英語を見付けたり、探したり、話したりといった主体的な関わりができるような環境づくりをしていく。

【次年度の数値目標】

○全カテゴリーで、全国平均レベルにする。